

# 即決 震災義援隊 再び

3月11日、東日本大震災が発生。巨大津波に襲われる海岸線の衝撃的な映像がテレビに映し出された。

16年前の阪神淡路大震災の記憶が重なった。神戸では震災発生直後から、アウトドア用品やキャンプの経験を生かした支援活動が有効だった。今回もきつと役に立てるに違いない。急がねば！

翌12日、私は神戸で発足した「アウトドア義援隊」の再開を決断した。

「人、物、金」

そのいずれかの支援を、アウトドアに関わる一般人や企業、団体に対してインターネットを通じて協力を募った。同時に2人の社員を先遣隊として現地に走らせた。

仙台港にあるアウトレットモールのモンベル直営店は津波の被害をもろに受けたが、幸い従業員は全員避難して無事だった。仙台にある他の2店舗も地

＝その1

## 辰野 勇 さん(63)

震の大きな被害を受けていた。

先遣隊から、現地でのガソリン補給が不可能との情報があり、私は単身ハイブリッド車で山形県に向かった。山形市商工観光課の担当者の紹介で株式会社「ミツミ電機」を訪ねた。同県天童市に使われていない工場跡があって、物資の集積基地として借りられそうだといいことだった。

「どれくらいの期間ですか？」

「分かりません。1カ月か2カ月か？」

「いつからですか？」

「明日にでも」

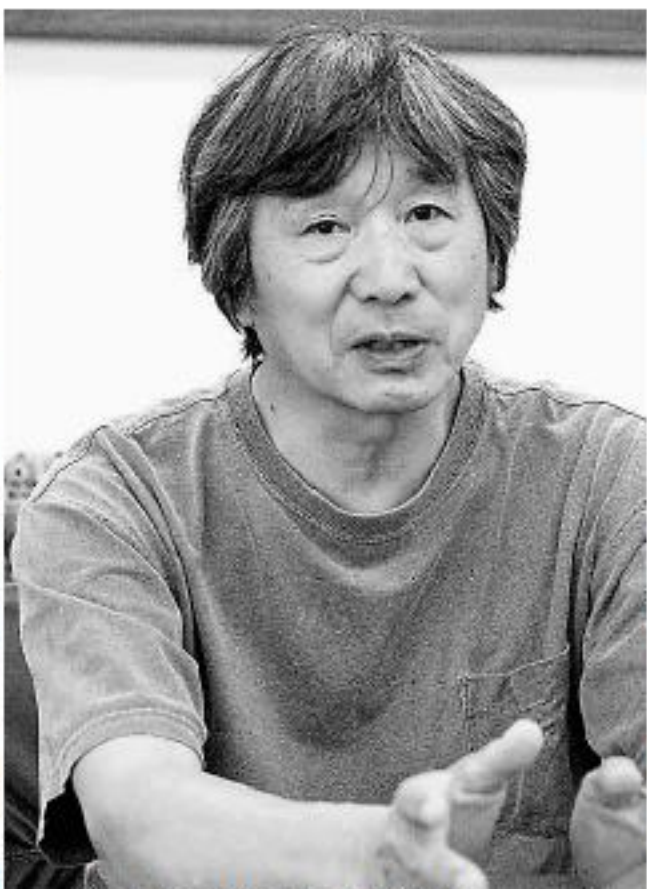
「……分かりました。お使いください」

即断、即決である。企業の決断は速い。

それに比べて、やはり行政の動きは遅かった。組織の体質と言って済まされない危機管理能力が問われる緊急事態である。その頃、国民のすべてが、何らかの形で被災者を支援したいと願っていた。しかし多くの自治体は、個人からの物資の送付を拒んだ。

大量に送られてくる物資の仕分けや配送が出来ないというのだ。

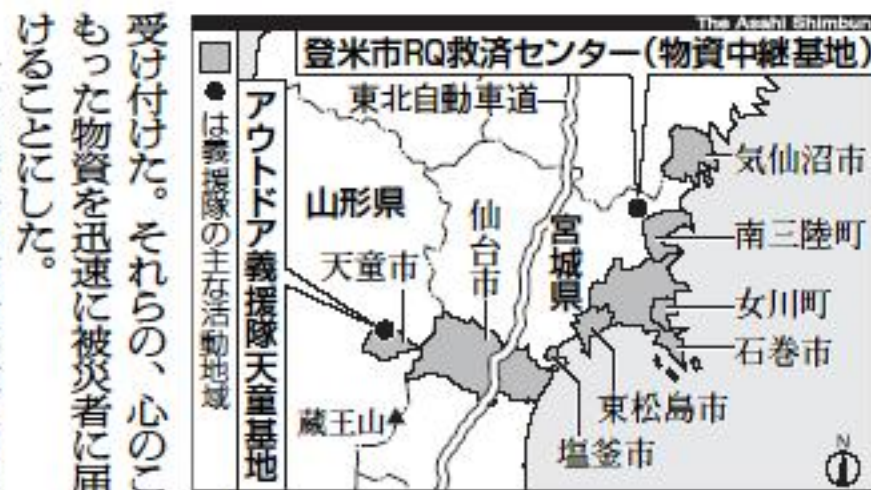
我々は、企業からの大量の物資とは別に、全国のモンベル直営店7カ所でも個人の救援物資を



辰野勇さんは国内外を駆け回っている。大阪の本社でじっとしていることは少ない

アウトドア用品メーカー「モンベル」会長

たつの・いさむ 1947年、堺市生まれ。69年に登攀困難とされるスイスのアイガー北壁を日本人として2番目に攻略、70年に国内初のクライミングスクールを開いた。「モンベル」(本社・大阪市西区)の創業は75年。カヌー、カヤック、横笛、陶芸、茶道などを趣味とする。奈良市在住。



受け付けた。それらの、心こもった物資を迅速に被災者に届けることにした。

一方、福島原発事故に関して、当局からの状況説明はまったく要領を得なかった。原発から90km離れた仙台でさえ放射能の不安が拭えなかった。社員やボランティアの安全をどのように確保しながら救援活動を進めるのか？ あらゆる事態を想定して私の心は揺れた。

めまぐるしく変化する状況の中で迅速な決断が求められた。それは、まるで悪天候の冬山で遭難者の救出に向かう登山隊のリーダーに求められる切迫した緊張感に似ていた。

国道48号で峠を越えれば、仙台までわずか40分の至近距離にある天童市には、ライフラインが確保されている。もし原発が爆発しても、蔵王が盾となってくれるはずだ。ボランティアは安心して物資の仕分け作業が出来る。後方支援基地としては申し分ない。我々は、ここ天童を現地本部として宮城の被災地への支援を開始した。(全27回)

人生

あおこよし